

人はなぜ死ぬのか？

人は誰しも必ず死を迎えます。そして「寿命がある」からこそ、「生きていく今」が尊くなるのです。

さあ、皆さまこんにちは。今月はいよいよ「お盆」の時期です。亡き親や御先祖様のことを思い、お仏壇やお墓にお供え物をして、お寺にお参りに行かれるという方がほとんどだと思います。

ところで『お盆』って何ですか？

何をするのでしょうか？
今月号では◆『お盆』を迎えるにあたり準備する事。◆ご先祖様に手を合わせるの、実は「〇〇」に手を合わせる事。などについて、お話させていただきます。

●【お盆を迎える前に準備すること】

ということ、お盆前の準備についてご紹介していきます。地域柄や、その土地に伝わる風習などの違いはありますが、あくまで『お盆』という風習の基本的な流れだと思ってお聞き下さいね。

まず8月1日は「釜蓋朔日（かまぶたついたち）」と呼びます。おとぎ話のような言い伝えなのですが、いわゆる地獄の釜のフタが開く日といわれています。この日を「お盆の入り」と考えて準備を始めていきます。

「お墓の掃除やお参り」・「お仏壇の掃除」・「盆提灯などの用意」などを行っていきましょう。

次に8月7日は「棚幡（たなばた）」と呼びます。ちなみに関東では7月お盆なので、7月7日はまさに「七夕」ですね。富山をはじめ多くの地域では8月お盆ということで、「七夕」ではなく「棚幡」です。

そんな「棚幡」には、御先祖様を迎える精霊棚（しよりりょうだな）を設置します。台の上には敷物を敷き、ナスやキュウリで作った精霊馬（しよりりょううま）や精霊牛などを用意します。割り箸や爪楊枝などを利用して、それぞれの野菜に足を刺して作ります。迎え盆に馬を作り、送り盆に牛を作って準備します。この意味はご存知の方も多いでしょう。精霊馬は、早く先祖の霊に帰ってきてほしい。精霊牛は、ユツクリあの世へ戻ってほしいとされています。おまけに、帰りが精霊牛な理由には、沢山の供物をお土産に連れて帰ってもらいたいという子孫達の先祖への思いが溢れた理由でもあります。

実はこれにも地域によって考え方は真逆のパターンがあります。ゆつくり丁寧にお迎えしたいから精霊牛で迎えて、急いで帰ってもらうために精霊馬をお供えするという地域もあるようですが、この逆のパターンに関しては、なぜに急いで帰ってもらう必要があるのかな？何故なんだろうかね？まあいざれにしても、先祖へ向ける子孫達の願いが形になったものです。



●【お盆期間中には何をするか？】

◆十三日：夕刻（時間は何時でも大丈夫です）になると「迎え火」を焚いて、ご先祖様をお迎えします。火を焚くのは、御先祖様が迷子にならないように「自宅はこちらですよ」と道案内のよう願いが込められています。

◆十四日と十五日：お盆中ご先祖様は、精霊棚に滞在されていると考えられています。果物や甘味、御膳などをお供えしましょう。

◆十六日：朝もシツカリお供え物をしてください。夕方暗くなってきたら「送り火」を焚いて送り出します。

という以上の流れが基本的な流れだと思つて、頭の片隅に置いて下されれば幸いです。知っているのと知らないのとでは、お盆中の心持ちがかなり違うと思います。

『お盆』になると、故郷を思い出すという日本人が圧倒的に多いと思つています。コロナ禍で迎える2度目のお盆ですが、改めて『お盆』の行事を噛み締めながら過ごして頂ければ、また大切な発見があるかもしれませんね。

●【ご先祖様に手を合わせる、実は・・・】

『生老病死』。この4文字、何と読むかご存知ですか？この4文字を初めて見たという方には、ぜひ覚えておいていただきたい言葉でもあります。この4文字は、仏教が誕生する根本の理由となったお釈迦様の問いから出た4文字なのです。読み方は「しよろうろびよう

し」です。仏教では『四苦八苦（しくはつく）』とも言いますが、私達人間が抱える悩みの根本とも言われている4つの苦しみ「生老病死」なのです。この4文字に込められた意味を一つずつ解説してみます。まず「生苦」というのは、私達は命を頂いて生まれてきます。そして生まれたからには生きていかなければなりません。その生きていく人生の中には人間関係をはじめとする、いくつもの苦悩に見舞われます。その苦悩の一つ一つと向き合つて、また乗り越えていかなければ生きていくことができせん。それがいわば「生苦」というものです。次に「老苦」とは、私達は年々歳を重ねて老いていきます。シミやシワも出てきて肌の張りも無くなってきました。白髪になったり禿げてくることもあるでしょう。物覚えも悪くなります。若い頃のように俊敏に動けず、行動も鈍くなります。それでも生きていかなければならないという「老苦」です。また「病苦」とは、病気のことで、今はコロナ禍でマスクを着用して、ワクチンの予防接種を受けながら、感染しないようにと細心の注意を払っています。コロナのような大きな病気ではないにしても、例えば風邪を引いたり、頭痛や腹痛になったり。あるいは白内障や難病に罹ることもあります。そんな病気と向き合つていかなければならないという「病苦」です。最後に「死苦」とは、臨終を迎えるという事です。生きとし生けるもの、みんな等しく必ず寿命があります。つまり臨終を迎えます。「死ぬのが怖い。できれば

死にたくない。「そう思われている方も少なくないのではないでしょうか？私達は不老不死ではありませんので「死」は避けられません。人生の最後には、必ず死を迎えなければならぬという「死苦」。こうやって、私達は避けたい4つの根本苦と共に、人生という一生を歩んでいくわけです。

ここでおさえておきたい教えがあります。「苦」という概念です。ところで皆さま、「苦しみ」って何だと思われませんか？ちよつと、あえて言葉に出して言ってみて下さい。そんな事を問われたら、何とお答えになられますかね？あまりにも漠然とし過ぎていて、一言で言葉にするのはなかなか難しいのではないかと思います。仏教では「苦しみ」のことを…「自分の思い通りにならないこと」と説明しています。小学生でも分かる言葉で簡潔ですよね。私自身、この仏教的解釈で納得できた一人でした。そうです。私達は自分の思い通りにならない一生を生きているというわけです。なのに、それを思い通りにしようとする、たちまち私達の心は「苦しみ」に支配されてしまいます。老化を抑えたいけれど、老いていく。病気になるたくないけど、病に罹る。死にたくないけど死んでいく。これらはいわば、当たり前のことです。私達の一生で経験する「生老病死」の四苦は当たり前のこと。いわば「自然現象」と言えると思います。この自然現象に抗おうとすると、無理をきたして悩み苦しみに囚われてしまうという事になるのではないのでしょうか。

そこで日蓮聖人は「人の寿命は無常

(むじょう)なり。出(い)づる気は入る気を待つ事なし。(略)かしこきも、はかなきも、老いたるも、若きも定め無き習いなり。されば先(ま)ず臨終(りんじゅう)の事を習(なら)うて、後(のち)に他事(たじ)を習(なら)べし【妙法尼御前御返事】と喝破されています。ちなみに「無常」というのは全ての物は移り変わっており、同じ状態に止まることはないという意味ですが、ここでは「死」を意味しています。

人の寿命は無常です。賢い人も、愚かな人も、老人も、若者も、いつ命を失うか分からない儂さが世の常ですから、まずは、臨終を迎える身であることを覚悟しましょう。そして覚悟したならば、初めて命がある「今」が、価値ある尊い時間として、自分の目の前に立ち現れてきます。私達にとつて本当の人生は、そこから始まるのかもしれないね。

皆さん「覚悟」って、こういう字を書きますよね。この「覚」も「悟」も、「さ」とる、「+」さるとる。「頭でさとり、心でもさるとる」ということになります。頭で理解しただけでは中途半端。本当の意味で悟ったことにはなりません。それを「覚悟」とは言いません。「心底さるとる」ことを「覚悟」と言うんです。言わば、実感として分かるという感覚でしようか。「そんなこと言ったって、まだ死んだことも無いのに、実感として分かるわけないじゃない。」そんな言葉が聞こえてきそうですけど、私もまだ死んだことはありません。まさに達観した感覚なのですが、たとえば仏壇の前に座り、親先祖に手を合わせて拝む

時、「いつかは自分も寿命が来る」ということを、ある意味、実感として感じる事があるのではないかと思います。如何ですか？そんな感覚を味わったことはありますか？気持ちを込めて真っ直ぐ親先祖と向き合い手を合わせていたら、そんな感覚を味わう機会もあるかと思えます。ちよつと強引な言い方ですが、騙されたと思つて、まずは御先祖様に手を合わせてみて下さい。感謝の気持ちと共に、自然と涙が溢れるかもしれません。その時に、寿命の儂さを感じられると思います。親先祖への想いを通して、今ある自分の命の尊さに感謝できた時、その瞬間、あなたは心底「覚悟」できた瞬間でもあると思います。どうか、そんな尊いお気持ちを感じて頂きたいと思えます。

命ある私達は、早かれ遅かれ生涯を終える時が来ます。生きとし生けるものは、致死率百割です。期限ある尊い命を生きている自分の命。不老不死ではありません。いつか必ず人生の最期、臨終を迎える自分の命。その時が1年後かもしれない。1ヶ月後かもしれない。明日かもしれない。災害や事故など、いつ臨終を迎えるか分からない儂い自分の命。だからこそ、「まず臨終の事を習うて、後に他事を習うべし」なのです。

「死」は怖いものではありません。「死」は人生の集大成です。「死」は人生の総決算です。

人は誰しも必ず死を迎えます。そして「寿命がある」からこそ、「生きている今」が尊くなるのです。

今月は『お盆』の月です。親先祖へ思いを致し、感謝の気持ちを届け、自分の

命の尊さを噛みしめる時間を過ごすて頂きたいと思えます。いずれやってくる「死」という人生の集大成の時に、慌てふためくようなことのないように、「覚悟」したあなたの今日が、益々輝く日々でありますように。心より祈っております。

合掌 副住職 谷川寛敬

